

伝書鳩

第16号

井上靖記念文化財団

落葉

井上 靖

——眼鏡がどこかへ逃げちゃった！

今朝、私が言うと、五歳の孫娘は方々探し廻った挙句、

——洗面所の鏡の横に匿れていたの！

と、眼鏡を書斎まで持って来てくれた。そしてその序でに縁側から庭を眺め、一面に散り敷いている枯葉を指差して、

——誰が撒いたの？

と訊いた。みごとな質問だったので、正しく答えてやらねばならなかったが、答えられなかった。

誰が撒いたのであろうか。答えられぬままに晝が過ぎ、夜になり、そして深更に及んでいる。耳を傾けると、庭では今も何ものが枯葉を振り撒いている。その音が聞える。



落葉(詩) 井上靖……………2

ご挨拶 井上修一……………6

今さら詮なきことながら 伊藤暁……………8

鳩のおしらせ①……………13

井上靖とシルクロード 藤枝晃先生のことなど 鈴木敏昭……………14

鳩のおしらせ②……………19

井上先生のことなど 角田明広……………20

井上靖の原郷 伏流する民俗世界③ 野本寛一……………26

鳩のおしらせ③……………41

関西と井上靖 黒田秀彦……………42

父の休息 家族の撮った写真から⑨ 井上卓也……………46

平成二十六年 事業報告 井上修一……………50

図書だより……………58

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子

一九九九年以来、長年にわたって静岡県長泉町にある井上靖文学館の館長をお務めになり、館の発展に尽くして下さった松本亮三氏が突然、九月末に逝去されました。今年も父の従軍日誌を中心とした企画展を開き、父が輜重輸卒として従軍した中国の各地を辿る旅の希望者を募り、出発を控えていたときのことです。心からご冥福をお祈りいたしますとともに、長年のご尽力への感謝の気持ちを改めて表するため、この文学館の歴史を少し振り返り、今回のご挨拶に代えさせていただきますと思います。

一九七〇年、スルガ銀行の岡野喜一郎氏が芹沢光治良と井上靖の偉業を讃えるため、建築家の菊竹清訓の協力を得て沼津市に財団法人芹沢・井上文学館（岡野喜一郎理事長、露木豊館長）を設立され、一九七三年からは同じく菊竹清訓の設計で長泉町に井上靖文学館を独立させ、両館併せて財団法人芹沢・井上文学館となりました。その後、二〇〇九年に芹沢文学館

が沼津市に寄贈され、長泉町の方は一般財団法人井上靖文学館（岡野光喜理事長、松本亮三館長）として残りました。通常、文学館は作家の没後に建てられますが、芹沢・井上文学館が設立された時は、両者とも作家として活躍中だったことは、誠に珍しいことであります。

さて、井上靖文学館は露木館長の後、傳田朴也館長（一九八三―一九九五）、野田和彦館長（一九九五―一九九九）と続き、その後を継がれた松本館長の代になって念願の館のリニューアルが実現されました。

当初の芹沢・井上文学館には「友の会」も併設され、会長は杉山賢二、遠藤永太郎、傳田朴也、杉山光司の各氏が務められ、その会報は芹沢、井上文学にとつて貴重な資料となっています。ただ、残念なことにごの会報は、芹沢文学館が沼津市に移った二〇〇九年の三月九日号（二一〇号）をもって終刊となりました。

井上靖文学館は当初よりスルガ銀行の全面的なご支援の下に設立・運営されております。生存中からこのような自己の文学の発信の場を与えられた父は幸せです。

今後、館が岡野光喜理事長、新たに就任される館長、徳山加陽学芸員等の皆様の許で一層発展することを心よりお祈り申し上げます。

平成二十七年十月吉日

私が新潮社に入社したのは昭和四十六年のことだから、勘定してみるともう半世紀近くも前のことになる。時の疾ときこと、驚くほかない。それはともかくとして、文学好きというだけで右も左も分からない私は出版部に配属され、「井上靖小説全集」の担当を命じられた。この全集の刊行開始前に単行本を一冊作ってはいたが、実際には「小説全集」が私の初めての仕事と言ってよかつた。刊行の企画自体は既に決定しており、この仕事をなぜ私が担当することになったのかは実はよく分からない。配属された先の上司が井上先生の担当編集者だったというそれだけのことだったのかもしれない。しかしいずれにせよ、私にとってこれは実にラッキーなことだった。この全集を担当したおかげで、その後

先生の担当にもなり、先生がお亡くなりになるまでの二十年間、ずっとその讐咳に接することができた。先生はよく、芸術は初めから一流のものに接することが大切だが、人間の場合も全く同じだ、とおっしゃっていた。実際、芸術家だけでなく、実業家でもスポーツマンでも、先生のお知り合いはその世界の第一人者ばかりだった（そう言えば先生は「第一級」という言葉をよくお使いになっていた）。その点からすれば、私は駆け出しの時分から井上靖という大作家の薫陶を受けることが出来たわけで、編集者としてこんな僥倖は滅多にあることではない。さて全集のことだが、先生はこの全集を決定版にしたいと考えておられたので、改めて全作品に注意深く

目を通され、驚くばかり入念かつ几帳面に加筆訂正を施された。それは徹底的と言うにとどまらず、一種の凄味のようなものさえ感じさせるくらいだった。

例えば「夏草冬濤」の訂正稿をいただいた時のこと。この作品は新潮文庫が底本として使われた。文章自体の訂正も随所にあつたが、手入れの多くは字句の訂正だった。かな表記を漢字表記に改めるというような場合が多かつた。例えば、「けんそん」を「謙遜」に、「まっか」を「真赤」に、「きょう」を「今日」にという具合である。

この作品には部落の子供たちが「どんどん焼き」に集まるシーンがある。この箇所のあるページは黒いボールペンの筆跡で「団子」の文字で埋まつた。「だんご」を「団子」に改めたのである。あるページは一面「黒文字」の語で一杯になった。楊枝やぎじの「くろもじ」を漢字に直したのである（「黒文字」の「黒」が旧字の「黑」だったことまではっきり覚えている）。慌しさの募る村の年末の場面では、何ページも「餅搗き」の几帳面な筆跡で埋まつた。「餅つき」は「餅搗き」に直し

てください、というような総括的な指示ではなく、いちいち自分で直されるのである。

几帳面と言えば、文章自体のお直しも実に几帳面だった。文庫判だから書き入れることのできるスペースは限られている。大幅な訂正になると先生は文章を原稿用紙に小さな文字で書き込み、それをきれいに切り取って本の該当箇所に貼りつけるのである。それがまた実に丁寧だった。文字も、原稿用紙の切り取り方も、貼りつけ方も、その紙片をどこに挿入するのかの指示まで。こういった何でもないようなディテールは折にふれてよく思い出されるが、私にとっては決して些細なことではなく、井上靖という作家の人間像の小さからざる部分を構成している。

毎月、このような訂正原稿を世田谷のお宅に（何度かは軽井沢のお宅に）いただきに通うのだが、往きはともかく、帰りは極力タクシーを使うようにした。私は幸い在社中に原稿を紛失したことは一度もなかったが、貴重な原稿を落したり置き忘れたりしないようにとの用心からだつた。巻末に収録する「自作解題」

の原稿をいただく時にも同じようにした。この「井上靖小説全集」は三十二巻だから、二年八ヶ月の間、このようなことが繰り返された。原稿取りにまつわるさまざまなことは先生の温顔とともに懐かしく思い出される。

ところで、私は先生のお作は結構読んでいた方だと思うが、ガチガチのブンガク青年だったので、「時代もの」はあまり読んでいなかった。しかし、この全集で「戦国無頼」「風と雲と砦」「風林火山」などに接し、そのおもしろさに目を開かれた。ただ、これらの作品はいわゆる「時代もの」とは少しく異なるように感じられた。私流に言えば、「詩」あるいは「心象風景」のようなものではないかと思った。

例えば「風林火山」の山本勘助は、実在の人物ではないようだが、歴史上に実際に存在した人物か否かということとは別に、現実世界にはこれほど純粹一途な人間というのはいま考えられないだろう。ところが、小説の中では勘助は鮮かな存在感を持って生きている。その姿には圧倒的なリアリティと迫力がある。著者は

つそり「割愛」されてしまったからだ。

別巻の月報に、編集を担当された曾根博義さんが次のようにお書きになっている。

「全体を二十五巻くらいに抑えたいのでそのつもりで編集プランを立ててくれないかという話だった。／既発表作品だけでも全部入れるとすれば確実に四十巻を越えてしまう。／何かを思い切って削らなければならぬ。」

その結果、詩・短篇・エッセイ・雑文などは断簡零墨に至るまで収録されたが、巻数を食う長篇については、「七十四本の長篇を四十一本に絞る（その後四十三本になったが）」ということになってしまったのだ。

「兵鼓」も落ちた。「戦国城砦群」も落ちた。「紅花」「地図にない島」のような地方紙発表の作品なども多数落ちた。今例として挙げた作品はいずれも、未刊行長篇のみで編集した（井上靖長篇小説シリーズ）と銘打って文藝春秋から刊行されたものだが、「井上靖小説全集」には収録されていた「緑の仲間」「風と雲と砦」「魔の季節」「河口」「傾ける海」といった私に

「時代もの」の形式を借り、登場人物たちに仮託して心中の詩や歌や夢を自由に羽ばたかせているのだろう。登場人物たちは極めて具体的に描かれているが、実際には抽象的な何ものかを代弁させられているのだ。著者の詩囊から零れ落ちたキラキラ光る詩と真実のしずく——私はそんなふうに理解して先生の「時代もの」を楽しむようになった。

さて、「小説全集」が完結してからも、私は担当編集者として先生のお宅に通い続けた。その間、「忘れ得ぬ芸術家たち」「井上靖全詩集」など多くの本を作らせていただいた。文庫本は何冊になるのか勘定するのもむずかしいくらいだ。先生が八十四歳でお亡くなりになるまでの二十年間というものは私にとって忘れ難い、そして二度と得られない貴重な時間だ。

先生がお亡くなりになって四年ほどで、いわゆる「没後全集」の刊行が始まった。この時は私は他の部署に移っていたために担当することが出来なかった。五年ほどを費して立派な全集が出来上ったのだが、私としては正直言って満足できなかった。長篇小説がご

とって馴染みのある作品も軒並み削られてしまった。

先に「時代もの」のことを書いたので、「兵鼓」や「戦国城砦群」について少し触れたい。「戦国無頼」や「風林火山」を読んだ時、詩のようでもあり美しいタブローのようでもあると感じて「時代もの」を見直した私は、「兵鼓」や「戦国城砦群」の単行本が出るとすぐに読んだ。いずれも大変おもしろかった。例えば「兵鼓」の巴御前。可憐で無垢で何といじらしいことか。そして、山吹や葵の一途な生き方。「戦国城砦群」の烈しく剛胆な男、大手荒之介。嫺々たる美しい女性、千里。野性的でおきやんな弥々。みんな紛れもなく著者の分身だ。転変定まらぬ運命の中でひとりひとりが光芒を放ちつつ自在に生きている。——しかし残念なことにこれらの魅力的な作品は全集に収録されなかった。

と書けば、何か曾根さんに対して悪く言っているように聞こえるかもしれないが、決してそうではない。月報を読めば分かるが、曾根さんの考え方は理に適っている。決断を迫られて一番苦しい思いをしたのは実

は曾根さんかもしれない。

それでは、何がこういう結果を招いたのかと言えば、やはり「二十五巻くらいに抑えたい」という基本方針そのものではないだろうか。

ここで思い出すことがある。私は以前から木山捷平という作家が好きでよく読んでいた。あの飄逸味が何とも言えない。その木山さんの全集がわが新潮社から出ることになり、私は喜んだ。しかし出来たものを見てがっかりした。私の好きな作品がごっそり抜け落ちている。この全集は二巻がひとつの函に入っているのだが、その第二巻の巻末にある浅見淵さんの「解説」を見ると次のようにある。

「版元の販売上の意向から、おのずと頁数の制限があり、その制限をいかに有効に費うかということを先ず考えた。この結果、純文学作品の完全な全集にしようということに双方の意見が纏まり——」。

その結果、軽みとユーモアの魅力的な「中間小説」がみな姿を消してしまったというわけだ。

両者は、やや事情が違うかもしれないが、「販売の

面から巻数を制限する」という点では姿勢は同じだ。「没後全集」の場合、巻数を絞った方がそれだけ買いやすいのか、巻数が多ければ販売部数は本当に減るのか、それでは何巻くらいが適正規模なのか、このあたりは複雑でむずかしい問題だ。一巻当りのページ数や価格との兼ね合いもある。

だが例えば「群舞」にしる「魔の季節」にしる何でもいいのだが、本体が全集に収録されていないにもかかわらず、その作品についての「作者の言葉」や「自作解題」だけが収録されているという場合がたくさんある。今さら詮なきことながら、これはどう考えても腑に落ちない。

「没後全集」は「生前全集」とは性格がちがう。今後新しい版が出るのであれば、「販売方針」が無条件に優先するのではなく、その前に「編集方針」そのものがよくよく吟味されるべきだと思う。

鳩のおしらせ①

◎井上靖記念館（旭川市）

【企画展】

○「井上靖と美術」展

平成二十七年十月十日～二十八年一月十一日

本展では、井上靖の美術記者時代の活躍に関する展示、自筆の美術エッセーの展示などを行い、「美術評論家井上靖」を探求します。

また、女性画商が主人公の小説『河口』に登場し、執筆当時は作家の手元にあった、フランス人画家「デュファイ」と「ロートレック」の素描画を展示し、井上と美術の関係に迫ります。

【第四回井上靖記念館青少年エッセーコンクール】

平成二十七年十二月十九日～二十八年二月二十一日

入賞十二作品を展示する「優秀作品展」を開催。

問い合わせ…井上靖記念館

北海道旭川市春光五条七丁目

☎〇一六六一五一―一八八

◎井上靖文学館（長泉町）

【企画展】

○「井上靖と戦争、家族、ふるさと」展

平成二十七年八月六日～二十八年三月二十九日

戦後七十年、井上靖の視点から「戦争、ふるさと、家族」をかんがえる企画展。

天城湯ヶ島から出征し、井上と同じ部隊で行軍した西川喜三郎氏の「軍務日記」、井上が戦地から持ち帰った銃弾などを初公開。

【文学展講座】

○「父の中国行軍日記」黒田佳子（詩人・井上靖次女）

平成二十八年三月十三日

問い合わせ…井上靖文学館

静岡県長泉町東野クレマチスの丘（スルガ平）五一

五―五七

☎〇五五―九八六一―七七七

鈴木敏昭(朝日カルチャーセンター講師・元京都府立高校教師)

一 京都大学と藤枝晃先生

私は浜松市の出身で、井上靖が通った旧制浜松中学の後身の県立浜松北高等学校を卒業しました。同級生のほとんどが東京圏に進学する中、私は、京都の歴史と文化、そして「反戦・自由」の伝統に憧れて、京都大学に入学しました。高校に続き大学でも、井上靖の後輩になったわけです。

京大の東洋史は、世界の最高水準といわれ、内藤湖南先生・狩野直喜先生・桑原隲蔵先生・羽田亨先生以来の伝統を持ち、当時も宮崎市定教授・田村実造教授・佐伯富教授らを擁していました。

も受賞されています。

当時助教教授の佐藤長先生もチベットの世界的権威で、後に学士院・恩賜賞を受賞されました。私は、佐藤先生にもずいぶんと可愛がっていたとき、晩年、奥様を亡くされて一人暮らしのお宅にお見舞いかたがたうかがっておりました。瀬戸内寂聴さんと親しく、その葬儀は瀬戸内寂聴さんが取り仕切っておられました。教室の雰囲気は、多少保守的なところもありましたが、基本的にはかなりリベラルで、家族的でした。学会発表の場である「東洋史談話会」の夜には、大学の教室で交歓パーティが行われ、学部ของ 教官・人文科学研究所の貝塚茂樹教授などの研究者の他、他大学の先生方や私たち研究室の大学院生・学生が和やかで自由に歓談していたものでした。

そうした中でも、私が薫陶を受けたのが人文科学研究所の助教教授であった藤枝晃先生(一九一〇―一九九八年)でした。先生はよく言っておられました。「井上靖のシルクロードの小説は自分がいろいろ教えたのだ」と。藤枝先生と井上靖は、京都帝国大学の学生時

のちに文化功労者ともなった宮崎先生は、その膨大な研究成果を『宮崎市定全集』(岩波書店)として残しておられます。宮崎先生の名著『論語の新研究』は、井上靖の小説「孔子」とはまた違った捉え方で孔子を論じています。

田村先生は、契丹・遼時代の「慶陵」の研究などで学士院・恩賜賞を受賞され、退官後は京都女子大学の学長を務められました。

弘法大師の直系の子孫である佐伯先生は、京大在学時代が井上靖と重なっており、小説「通夜の客」の登場人物のモデルともいわれています。謹厳実直ながらも慈父のような先生でした。私は、その佐伯先生にずいぶんと可愛がっていただきました。学士院・恩賜賞

代、同じ文学部でおそらくずいぶん親しくしておられたのだと思います。

藤枝先生は、「敦煌学」および西域出土の古写本研究の世界的な権威です。書道にも堪能で、毎年十一月に行われる東洋史学の学会発表会「東洋史談話会」の看板を、その独特な字でお書きになっておられました。篆刻も巧みで、その方面でも有名でした。温厚で、とても気さくな方で、私たち学生にもいつも笑顔で接してくださいました。

一九八一年に中国の南開大学で敦煌学を講じた際に、同大学の関係者から「敦煌は中国にあるが、敦煌学は国外にあった」と賛嘆されたというエピソードはよく知られています。

藤枝先生は、現在の大阪市住之江区のご出身で、旧制の大阪高校を経て、一九三四(昭和九)年に京都帝国大学文学部史学科を卒業されました。一九四八(昭和二三)年、京都大学人文科学研究所の助教教授に就任され、一九五九(昭和三四)年、「居庸関に関する共同研究」により、日本学士院賞を受賞。私の在学中の

一九六二（昭和三七）年には、文学博士の学位を取得され、私の卒業後の一九六八（昭和四三）年に、京都大学人文科学研究所教授とられました。そして、一九七五（昭和五〇）年に、京都大学を定年退官、名誉教授となられ、一九九八（平成一〇）年、お亡くなりになりました。

晩年、私の住んでいる京都市左京区岩倉で時々お目にかかりました。ご令息が岩倉に住んでおられて、時々来るのだと嬉しそうにお話しされていました。

二 シルクロードと大谷探検隊

シルクロードは、昭和三〇年代に学生時代をすごした私たちより、上の世代の日本人には、とてもロマンチックに響く言葉で、一度は行ってみたいと憧れる地域だと思います。世界史の教師をずっとやってきた私もそうです。私は、井上靖のシルクロードものを読み、憧れて、西安からローマまで、アフガニスタン地域とイラクを除いて、ほぼ周遊しました。特に、中央アジ

アの敦煌・トルファン・カシユガル・サマルカンドなどは、思い出深いものがあります。

「シルクロード」という名称は、一九世紀のドイツの地理学者リヒトホーフエンが、中国の特産の絹を西方のイランやインドあるいはローマへ運ぶ中央アジアの交易路を、「絹の道」と呼んだのが始まりです。リヒトホーフエンの弟子の地理学者ヘディングが、自らの中央アジア探検の旅行記の書名としてこの言葉を用いたことで、世界に広く知られるようになりました。

ヘディングの発見を受けて、一九〇二（明治三五）年、数年後に浄土真宗本願寺派（西本願寺）の第二二代法主となる大谷光瑞（おわたにこうずい二八七六一九四八年）が、中央アジアに学術探検隊を派遣します。仏教研究の新資料発見を目的としたもので、その後一九一四（大正三）年までの間に、計三回の派遣が行われました。これが有名な「大谷探検隊」です。

当時、日本の仏教界は、大変な危機に直面していました。明治初年の「廃仏毀釈」は仏教界に大きな打撃を与えましたが、それは同時に、仏教界の人々に、仏

教復興の強い願いを起こさせる大きなきっかけともなりました。大谷光瑞の父、西本願寺第二一代法主大谷光尊は、沈滞する教団を活性化するために西洋の教育制度を取り入れ、人材の育成に乗り出します。当時、西洋では仏教研究において新たな潮流が起こっており、サンスクリット語、パリー語による仏典研究が盛んに行われていました。西本願寺も西洋に留学生を送り、研究成果を取り入れようとします。そして、法主の息子である光瑞がロンドンに留学することになったのです。最初の大谷探検隊の派遣は、ロンドン留学中の光瑞が自ら指揮を執って行われました。

当時、仏教伝来に関して中央アジアの歴史的・地理的解明が進展しつつありました。かつてアジア一帯に広まっていた仏教、そしてその仏教を支えていた人々の情熱、それらを調査し、当時の社会に知らしめようとした大谷光尊の先見性を受け継いだのが、長男の大谷光瑞の大谷探検隊です。

大谷探検隊の調査の規模は、他国（スウェーデン・ロシア・イギリス・フランス・ドイツ）の探検隊よりも

広範囲なものでした。探検に加わった隊員も一〇代から二〇代の若い僧侶たちでした。その苦勞の足跡と成果が、京都の「龍谷ミュージアム」（龍谷大学）で詳しく展示されています。

大谷探検隊に数年ほど先立つ一九〇〇年、敦煌莫高窟の第一六窟にいた道士・王円籙が、崩れ落ちた壁の中に四畳半ほどの空間があることに気づきました。そして、その中に大量の古文書を発見します。これらの文献の研究が進み、「敦煌学」が生まれました。敦煌学の第一人者は、先に述べたように京大の藤枝晃先生です。

井上靖は、「封じ込められていた大量の文献は、敦煌が西夏により占領された際に経典を焚書されることを恐れて隠した」という説にもとづいて、「敦煌」を書きました。

井上靖は、学生時代から新聞記者時代にかけて、藤枝晃先生からこれらの敦煌学の研究状況の知識を得ていたと考えられます。軍国主義と戦争の暗い世相の中、敦煌文献にまつわるエピソードは、大いなるロマンを

井上靖にあたえたことでしょう。それがのちの作品執筆に生かされたのだらうと思います。

三 変貌するシルクロード

今日では、シルクロードは、「アジア・ハイウェイ」と呼ばれる、ユーラシア大陸を縦横に走る高速道路となっています。アジアとヨーロッパを結ぶ大動脈です。新興国のアゼルバイジャンやカザフスタンの経済発展には目を見張るものがあります。石油・天然ガス・レアメタルなどの天然資源が豊富で、今後の経済成長は底知れぬものがあるようです。

新疆ウイグル自治区では、「孫悟空」で有名なトルファン^{トルファン}の火焰山やベゼクリフ千仏洞の横を、上海から直通の高速道路が通っております。その反対側には油田掘削用の機械が林立し、風力発電の巨大なプロペラも回っています。私も訪れてびびくりしました。ロマンチックなシルクロードというのは過去のイメージになっってしまったようです。

◎井上卓也氏近著のご紹介

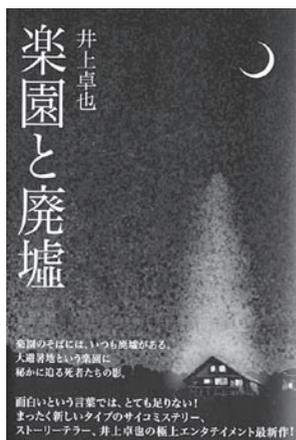
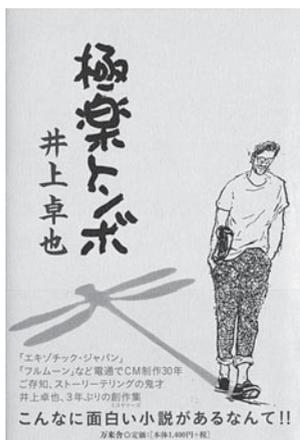
『伝書鳩』八号から本号まで九回にわたり、連載「父の休息——家族の撮った写真から」をご執筆いただいた井上卓也氏の近著をご紹介します。

○『極楽トンボ』（万来舎、二〇一四年）
 広告業界でCMプランナーとして働く主人公は、テレビでヒットCMを連発する超売れっ子。女性関係も賑やかで、その人生は順風満帆に見えたが、思わぬ結末が待っていた……。勝ったり、負けたり、ふくらんだり、しぼんだりの人生を、巧みなストーリーテリングで読ませる表題作をはじめ、人生の運、不運の不可解を痛快に描いたエンタテイメント小説集。

○『楽園と廃墟』（万来舎、二〇一五年）
 大避暑地という楽園に、密かに迫る死者たちの影。人は死んだらどこに行く？ 人は死んだらこの世に来る。まったく新しいタイプのサイコムステリー。

中国とロシア、そして中央アジアの国々などによる国際的な協力体「上海協力機構」が、二〇〇一年につくられました。それにインド・パキスタン・トルコやヨーロッパの国々、オーストラリアなどが、いろいろな形で協力しています。

このような動きの中で、今年、「アジアインフラ投資銀行（AIIB）」ができました。シルクロードの変貌は、もともと進むと思われれます。



問い合わせ：万来舎 ☎ 03-5212-4455 / <http://www.banraisha.co.jp>

井上先生のことなど

角田明広（元新日鉄勤務）

「井上靖」に私が初めて出会ったのは中学二年の時でした。歴史研究部に属しており、年一回のレポートのテーマに、なにをトチ狂ったのか鑑真和上を選ぶように思いついたのです。とにかく渋谷の大きな本屋に行つて一冊買ってきました。読もうとしたのですが、漢字ばかりにレ点とか二、一の記号がついた文に解説が施してあるような本で、まるで歯が立ちません。では、「井上靖」の『天平の薨』を読んでみました。子供心に感動はしたのですが、レポートの材料にはならず、なんだったか別のテーマでお茶を濁しました。

それから二年後、高校一年の時に「井上先生」にお目にかかりました。今回久しぶりに『天平の薨』を読み直してみましたら、ほぼ冒頭に「この時期の日本は

……人間の成長でいえば少年から青年への移行期であり……」とありました。高校一年、十六歳といえませんがこの時期、あらためてこの時期に先生にお会いし、以後長い間お世話になり、ご指導を受けた幸せを感じています。

私が十六歳の時、毎日新聞のパリ支局長をしていた父が、ローマ・オリンピックの臨時支局長になり、毎日の大先輩として観戦記を書いていただくために、先生はローマにいらつしやいました。私も夏休みにローマに行き、オリンピック終了後に先生と両親の旅行にご一緒させていただいたのが最初の出会いです。昭和五四年に出された『私の中の風景』というご著書の中

に、ミラノで「夜、十一時近くになってから、角田明氏（父）と令息（一）明広君が現れる」と書いてあります。これが私の先生との最初の出会いです。同書のもう少し後に「今日はモンブランを見るために山麓の町シャモニーへ行く日である。九時にホテルを出発。一行は角田明氏と令息（再び一）明広君と私の三人」ともあります。私が出てくるのはこれだけですが、最初の出会いをご著書に書いていただくなど、まことに豪華なことだと思います。

イタリアからスイス、南フランスを父の運転する車で旅をして、私はパリで最終、一人で東京に戻りました。先生はその後も両親と南欧など旅行を続けられました。前記のご著書には、その様子が詳しく綴られています。

東京で両親と離れて暮らす私をかわいそうだと思つていただいたのでしょうか、以後度々ご自宅にお招き下さいました。奥様はじめご家族の皆様も本当に暖かく迎えて下さり、まことに居心地よく、図々しく入り浸らせていただきました。ことに毎年のお正月は、元日

は文壇関係の偉い方々の宴、二日はご家族だけの宴、私はその二日に混ぜていただきました。奥様のお手料理を中心とするお節、未成年の時から少しだけ、大人になってからは沢山いただいたお酒、団らん……、この時のことを思い出すと今でもしみりするほど懐かしくなります。

私の結婚の時、高校生の時から勝手に決め込んでいたお仲人をお願いし、快く引き受けていただきました。そのご縁もあって、結婚後、妻と二人の息子も二日の宴に加わらせていただきました。息子たちには、ほぼ同年代の大勢のお孫さん方といとご同士のような戯れ合い、少し複雑な造りのお宅でトイレの帰りに家の中で迷子になったりするという狭い自宅の生活では考えられないような冒険、四十前後になった彼らにも大切な懐かしい思い出になっています。

次に先生を中心とした会話で、特に記憶に鮮明なものを二つご報告してみます。

お宅に伺わせていただくようになってから間もなく、

日本でのデビュー前だった指揮者の小澤征爾さんと一緒になったことがありました。お宅の居間のアップライトのピアノでショパンの曲を聴かせてもらいました。先生が「指揮者というのは派手な職業ですねー。作家なんてたまにどっかに名前が印刷されるぐらいですよ」などという雑談。小澤さんが「評論家っていうのは困ったものですね、なんにもわかってなくせに、どっかの大学の美学かなんか出て、それだけで偉そうな顔してる！」と憤懣をぶつけられました。先生はニコニコというかニヤニヤというか、穏やかに微笑まされて「私も美学なんですがね、たしかにおっしゃる通り。私も憎ったらしい評論家はいくらでもいますよ」とお返事。小澤さん、さぞやお困りになるかと思いきや、「ホントにそうですな」と、評論家けしからんだけを受け止めて泰然としていらっしゃった。文豪と若き天才指揮者、やはり双方大したものだと、感心したものでした。

これはお宅でのことではありませんが、私の長男の五歳の祝いに先生ご夫妻もいらしていただきました。

書き終えてから、いろいろ御厄介をかけたなり、お世話になったりした方々に、申訳ないと思うことは、小説のどこにもそれらの大部分のものが取入れられていないことである。では、それらはどこへ使われたかと言うと、すべて作者のイメージを形成する上に使われているのである」という一文があります。

今思ってみますと、色々な作品をお書きになった前後にまさに、イメージを形成された部分を沢山聴かせて下さいました。

例えば『星と祭』の執筆のために様々な十一面観音を観て、その感動で筆を進められたことなど。その他『風濤』など幾つかの小説について、イメージ形成過程のお話しを伺いました。今でも時折先生の作品を読み返すと、読んでの感動よりもお話しでの記憶の感動の方が強いような気がします。

そうした中で、是非ご報告しておきたいのは、『孔子』のことです。

『孔子』の構想は長いことお持ちだったので、書き終わられる随分前から折に触れて断片的なお話しは伺

その時私の慶應の恩師で歴史哲学の神山教授にもきていただき、井上、神山両先生の会話をそばでお聞きしていただきました。神山先生が「最近の哲学はまるで数学みたいで、ワーッと論理式を書いて説明するんですよ」とおっしゃったのに対して井上先生が「昔、私は京都ではごろごろして、まるで勉強はしなかったけれど、哲学だけは魅力を感じていました。でも今のお話しの、数学的哲学」というのにはやはりあまり魅力を感じませんね。私たちの時は今の朝永振一郎博士のお父さんの朝永三十郎さんの『私の自覚史』なんかを読んだものです。『私の自覚史』なんて、名前だけでもいいですねー」とお応えになった。とても印象的な会話でした。

次には先生の作品に関わる思い出を少し書いてみます。

『新編・歴史小説の周囲』所収の「私の敦煌資料」の中に、『敦煌』を書くにあたって多くの先達の研究記録に助けられたことを記されたあと、「小説『敦煌』

つていました。

上梓された直後に家族四人で何い、飛驒の高山の風景などのお話しに併せて、『孔子』のお話しをして下さいました。記憶にあるいくつかを書かせていただきます。

①孔子は日本では江戸時代だけでなく、今日に至るまで危険思想として歪められてきた。例えば「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり」は従来「朝に真理を知れば、夕に死んでもいい」と解してきたが、「朝に道理の行われる国が誕生したことを知れば、夕に死してもよい」と解するのが正しい。ところが道理の行われる国などはなかなかできないから、危険思想として排されてしまった。

②「仁」という字は「二人」という文字である。これをヒューマニズムなどと解するのは誤り。兄と弟、夫と妻、など人間二人の間に成り立つ関係と解すべきである。

同様に「信」とは「人が言う」つまり、「人は嘘

は言わない」「人の言うことは信じる」と解すべき。
孔子の言ったことは、その様に単純であり、且つ
厳しく激しい。

③『孔子』を書くのに二十年かかった。先ずどういう
設定とするか、これが難しかった。儒教の問題とし
て考えると中国、韓国、日本それぞれの立場から異
論が出る。そこで私は、孔子の死の前後の話とし
て書いた。それならば儒教は成立していなかった時
代のことであり、余計な批判は避けられる。

④孔子後千年の呉道子という画家が「拝むもの」とし
て孔子の肖像を描いた。「拝むもの」だから「しわ
くちや」の人としたが、何の根拠もない。

私は孔子の容貌は一切書かなかった。それは読者
が自分で創って欲しい。読めば自ずから浮かんでく
る、そのように書いた。

お話しのと、直筆の原稿を見せていただきました
（これはその後日本近代文学館に所蔵されることのでし
た）。先生のあの力強い筆圧の高そうな文字で書かれ

た、一字の訂正もない、それだけで芸術作品と思える
見事な原稿でした。

奥様が「普段は私が清書をするんですが、孔子だけ
は自分で言うと言って……」とおっしゃいました。

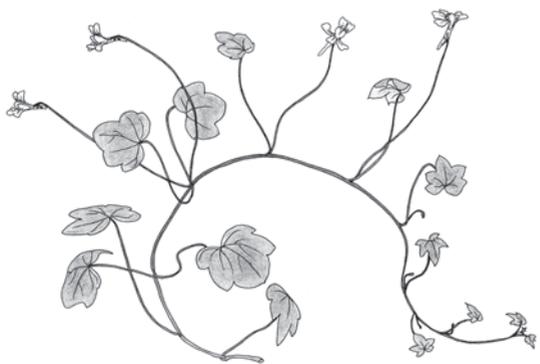
お話しの後、真向法の修練の賜物だとおっしゃって、
床に座られて頭を膝にぺたんくとくっつけて見せて下さ
ったり、私たち夫婦にも息子たちにもそれぞれにご署
名本をいただいたりして、辞去しました。この時が先
生にお会いした最後でした。

先生がお亡くなりになった後も、長男が結婚してお
嫁さんが自慢でたまらず、どうしてもお披露目したい
とご家族だけの御年始の席に押し掛けたり、教師志望
の次男がご長男・修一さんに何回も推薦状を書いてい
ただいたり、今日に至るまでお世話になり、ご迷惑
をかけっぱなしが続いています。

先日、修一さんからお電話で、『伝書鳩』に書いて
下さい、「なにしろ明広さんは、父を直接知っている

人の最後の世代なんですよ」とのこと。先生と初めて
お会いしてから五十五年、十六歳だった私も古稀を過
ぎました。たしかにそうかもしれないなあと思います。
数年前知り合いの外人さんを案内して浅草に行き、
昼食に永井荷風がストリッパーさん達と一緒に行った
という洋食屋さんに行きました。会計の時、おばさん
に聞いたら、「必ずあの席にいらっしゃったんですよ」
と懐かしそうに話してくれました。帰って息子にその
話しをすると「永井荷風を知っているお婆さんと、井
上靖を知っているお爺さんが……」と言いました。な
るほどそうか、昭和文学のサブ・サブ・ヒストリーの
一情景だったのかもしれないと思いました。

〔付記〕平成十六年に出された『天城の人と文化の融合
——思い出の井上靖』（天城湯が島ふるさと叢書・第十
三集）にも書かせていただきました。そちらとの重複も
多いことをお赦し下さい。



野本寛一（近畿大学名誉教授・民俗学）

天城の食とその深層

『幼き日のこと』の中に季節感の原点を語る部分がある。「……バケツや手桶には氷が張っていた。私は今でも幼い頃の冬のことを考えると、まっ先に眼に浮かんで来るのは、バケツや手桶や、調理場の隅に置かれてあった甕かぶの中の氷片を浮かべた水の色である。氷が張っている時も、張っていない時も、水は少し青黒い色を呈して静まり返っている。あらゆるものを拒否しているかのような不思議な静まり方である。現在、あのような水にお目にかかることはない。……今思うと、幼い心に、それは冷厳な冬の象徴のようなものと

して受取られていたようである。高等学校時代を金沢で過ごし、三年間だけではあるが、雪国の生活も知っている。また同じ頃、父は弘前の師団に勤めていたので、弘前の冬の生活も覗いている。しかし、幼い頃、私が伊豆で知った冬の冷厳さはなかった。冬というものが持っている最も本質的なものを、しかも、夾雑物なしに、幼い心が受けとっていたとでも言うほかないようである。』（『幼き日のこと』、以下の引用部も作品名を示さない限りは同じ）。作家が幼少年期に体感した天城山塊北麓、その谷の冬の冷えこみには厳しいものがあり、時に雪国の冬よりも鋭いものがあつた。それは、作家の五感・感性・心性・季節感を培う原点になつた。

天城山塊の冬は天然氷の製氷を可能にした。厳しい寒さの夜、人びとは冷えた身を暖めるために大根葉を干して袋に入れたもの、柑橘の皮などを風呂に入れたのだが、湯ヶ島小字長野の浅田まささん（明治四十二年生まれ）は、この地では、加えて、ゴシ（イヌガヤ）の実を煎じた汁・イチジクの葉を煎じた汁を風呂に加えて冷えこんだ体を暖めたと語っていた。

この地の四季めぐりに連動したさまざまな遊び、風土性を滲ませた自家の年中行事、おかのお婆さんとの土蔵での暮らしの日々の食生活などは、井上靖の心や文学に底流する基調や音形成のひとつの要因となつている。



山桑の実

狩猟・漁撈・遠隔地探索に脈略を持つような小学校高学年の遊びについては別に述べるとして、次の記述に注目したい。「小学校へ

上がつてからは農家の子供たちにつき合つて、食べられるものは、うまかうと、まずかうと、何でも食べた。春先になると、虎杖いたどり、かんぼ、つばな、そんなものを食べた。ぐみも食べ、あけびも食べた。苺や桑の実はこちらのこと、スイツパという酸っぱいだけの雑草も食べた。つつじの花も食べ、つつじの葉が変形してふくらんだのものも食べた。山桃、さくらんぼ、椎の実、それから山芋の蔓にくつついている「むかご」というのも食べた。ニッキの木の皮をむいて、それも食べた。蜂の子も食べ、メンザと呼んでいた孵化したばかりの魚の子も食べた。——ここにはあらゆる採集系の食物を食べつつ野辺・里山めぐりをする遊びがある。季節めぐりの中で、旬の採集物を味わいつつ遊ぶのである。若干の年齢階梯のある集団の中で、これは食べられる、これは食べられない、○○はどここの山に行けばあるという伝承が生きており、味覚の実習にもなった。こうしたことが、行動力、未知なるものへの探究心を養つたのである。

季節の食べもの

春——山菜・野草

先に紹介した文章の中にも春の山野草はあったが、春の食膳に、「うどの和物」「芹」「蕨」「蒨の臺」などが載ったことがとり立てて書かれている。これらの山菜・野草には、独得の苦みや刺激があるので一般的には幼少年にはあまり好まれないのだが、幼少年期の井上靖が毎春これらを食していたことは注目される。

山形県・新潟県の積雪地帯を中心に「キドい」という形容詞の方言が今でも生きている。味覚・嗅覚の刺激が極めて強い意味だ。上記の山菜・野草はまさしくこれに該当する。そして、これらの雪国では、「早春に、キドさのある山菜・野草を食べて冬の穢れを除く」「山菜のキドさで冬の汚れを除く」といった口誦句が広く語られてきた。深い雪に行動力を阻まれ、運動不足になり、精神も鬱屈する。雪に閉ざされて冬籠りをする人びとは、キドさのある山菜・野草を食べて



天城峠の氷室。北向き、山地掘り下げ、石垣構築など、くふうをこらして氷の溶解を防いで貯蔵する

復活し、活動の季節、春を迎えたのだ。天城山塊北麓の地は雪に埋もれる冬籠りの地ではないが、この地の冬は作家が指摘するごとく底冷えのする厳しい冬であるだけに、春の生命力・大地の力満ちた山菜・野草を食べ、自然の生命力を体内に迎えて活動の季節に入ったのである。



春を告げる蒨の臺

夏——天城の天然氷

「ひと夏に二回か三回、水のぶっかきにありついた。どこからか貰うこともあれば、おかのお婆さんに連れられて、集落のはずれにある氷蔵まで出掛けて行って、水を買って来ることもあった。氷蔵と言っても、農家の納屋を改造したもので、そこを管理している家の人が鍵を持って氷蔵へ案内してくれた。表戸を開けると

内部は薄暗く、冷たい空気が立ち籠めている。案内人は床の板をめくって、地下の穴から氷の固まりを取り出すと、鋸で適当な大きさに切り、残りは再び地下の氷室に仕舞い込んだ。……土蔵に帰り着く頃は、バケツの中の氷は大分減っている。おかのお婆さんは、その氷を出刃庖丁で二つか三つに割り、その一つを布巾に包んで、上から金槌で叩く。そして小さくなったのをどんぶりに入れ、白砂糖をかけて、私の前に置く。それからもう一度同じ操作を繰り返して自分の分を作る。土蔵の入口に並んで腰を降ろし、二人が氷を口の中に入れるまでに大分手間がかかる。」——天然氷を貯蔵する氷室（氷蔵）の様子、近代製氷の掻き氷とは異なる天然氷ブツ欠きの食法などがじつによく描かれている。

旧天城トンネル北口からなだかな坂を約一キロほど北へ下ると、本谷川に架かる白橋に出会う。橋の手前上手、北向きの陰地に山を削って構えた厚い石垣で守られた氷室がある。冬から夏まで天然氷を貯蔵するために陰地が選ばれる。この地に天然氷の氷室が営ま



段差を利用して水を下方に導く棚田・ワサビ田型にくふうされた、土着的な氷池



水生地近くにある廃棄されたワサビ田。段差地形を利用している

れたのは大正初期から昭和初期にかけてのことだとされている。氷室の上手には三面の氷池を確かめることができた。池はコンクリート打ちで五間に五間、五間に三間ほどなどまちまちだが、深さは五〇センチである。天城本谷の清浄な水を、順次、ワサビ田のように上から下へ送る形で水路が設けられている。狭隘な地で造成された天城の氷池には、地元のワサビ田・棚田の技術が生かされている。伝承では一晩で一〇センチになる水を重ねながら厚くしたと伝えられるが、その詳細は不明である。また、他に数面の氷池があったと伝えられている。近代以降も、食品冷蔵、病者の解熱、蚕種の孵化抑制などのために天然氷が活躍した。長野県飯田市の宮下宏さん（昭和六年生まれ）から天然氷の製造について聞いたことがあった。まず、清浄な水の選定・導入、ゴミ類の徹底排除。零下七度で池の水は氷る。氷上に降る雪も製氷には大敵で直ちに掃き除く。親方は気温・気象に気を配りながら氷切り出しの日を決める。筋入れ人・切り人・落とし人などが組織的に働き、切り氷は氷室に運ばれ縦に並べられる。上・

下・横にオガ屑をつめる。こうして夏まで貯蔵されるのである。——天城の氷室は松本清張の小説『天城越え』にも登場する。

天城で天然氷作りが可能になったのは何よりも、天城の冬の冷厳な気候環境と清浄な水による。氷室のある位置の対岸山中には「水生地」と呼ばれる地がある。この地名には、ワサビ栽培・稲作・日々の暮らしで美しい水を愛でる天城湯ヶ島の人びとを感じられる。

この地で天然氷が作られ、氷室が営まれた要因——それは、名湯、湯ヶ島温泉の温泉宿を中心に、周辺地域の温泉宿や料亭の近代化の中の要請に因るため、さらには、明治三十七年旧天城トンネルの完成を機に、湯ヶ島から下田へ、さらに大島へと続く新たな観光ルート開発もかかわっていたものと思われる。

幼い井上靖がおかのお婆さんと訪れたという湯ヶ島集落の中にあつた氷蔵は、天城峠の天然氷を湯ヶ島温泉の宿や、上・下流部の温泉宿、あるいは湯ヶ島の人びとに分売する取次の氷室だったことがわかる。引用文中にもある「管理している家の人」「案内人」とい

った表現によってもそれが知れる。

古代氷室は『日本書紀』仁徳天皇六十二年条に見える。その後の時代にも、氷下賜や氷献上の記録はある。民俗事例としても、六月一日を氷の朔日・氷餅休みなどと呼び、氷や凍み餅を食べる地がある。夏を乗りきるための儀礼だと考えることができる。新潟県村上市には「衣脱ぎトロロ」と称し、この日とろろ汁を食べる。人の皮が剥ける日だと伝えるのであるが、夏を迎える再生儀礼だとも考えられる。制服を夏服に替えるのもこの日である。この日は厳しい夏を乗りきるための体力充実・生命力再生の日とされてきたのである。幼い靖とおかのお婆さんが並んで氷を食べている姿はほほえましい。楽しい姿であるが、ここには夏を乗りきる古層の祈りも感じられる。

初秋——金山寺を仕込む季節

「伊豆の農村では、昔は三度三度金山寺味噌を食卓に出したものである。それを造る家によって、多少金山寺味噌の味が異ったり、その中に入れてある野菜の

種類が違っていたりした。西平という字にある親戚の家の金山寺味噌が最上であるということになっていた。……おかのお婆さんによって注ぎ込まれた金山寺味噌への信仰は、今も私の中で生きているのである。」——、「生姜とらつきようと金山寺味噌が常に食卓の上にあった。」「オナメって、お味噌のオナメ?」「(「しろばんば」などに金山寺味噌が頻出する。

味噌には調理味噌と副食味噌とがあり、副食味噌のことを嘗め味噌・嘗めものとも呼ぶ。金山寺(径山寺)味噌は嘗め味噌の代表である。「オナメ」とはその別称である。長野下組の浅田くみさん(大正十年生まれ)は以下のように語る。「オナメを仕込むのは夏蚕あがりの九月だった。それは茄子・生姜・紫蘇の実の収穫を待っての時期で、これらをオナメに入れなければならぬからだ。煎った小麦と大豆・小麦麩・塩、それに先の野菜の干したものを漬けこむ。一か月漬けると十月十七日の長野神社のお祭りには新しい金山寺を食べることができた。新しいオナメを餅につけて食べることもおいしい。また、オナメ茶漬には、必ず焙煎

で採んだお茶を使った。」——長野沖組の浅田純子さん(昭和二年生まれ)は、「オナメは、茄子・生姜がとれてから九月に仕込んだ。大豆と裸麦を大釜で煮て、麩・塩・乾燥させた野菜を混ぜて寝かす。」と語る。沖組の浅田喜朗(昭和十五年生まれ)家では次のようにした。オナメは九月に仕込む。茄子・生姜・胡瓜を干したものを、小麦と大豆、米糶を混ぜて塩を加える。長野神社の祭りには餅に新しいオナメをつけて食べる。オナメ茶漬は朝飯か昼飯に食べた。

筆者が育った静岡県牧之原市の旧菅山村域では金山寺のことを「ナットウ」と呼んだ。そこには糸引納豆



仕込み中の金山寺

の食習はなかった。仕込みは秋茄子がとれてからと言いつていられた。野菜類は茄子・生姜・紫蘇の実、それに冬瓜が入っていた。昼食には毎日これを食べ

いた。いまだに執着があり、金山寺を買って食べているのだが、総じて甘味が過剰で、少年期になんていた引き締まった味にはめぐり合わない。調理味噌は通常大豆一升に対して〇合塩といった基準があり、寒いところほど塩分を少なくし、暖かいところほど塩分を多くしなければならぬとされている。金山寺も、地方や家々によって混合野菜の数や量が異なるので、塩の量も、味も異なってくるのである。

秋——とろろ

「お茶漬サラサラ、とろろでツルツル」という言葉をおかのお婆さんから教わった、とある。ここには、「お茶漬」と「とろろ」を喉越しの速さで括り、同音反復の擬音語で対応させるおもしろさがあるのだが、じつは、お茶漬は簡易食・麩の食、とろろは御馳走・晴れの食なのである。『しろばんば』の中に、洪作が沼津の「かみきの小母さん」から、お御馳走では何が好きかと尋ねられる場面がある。洪作は、真先に「とろろ」をあげる。小母さんは、好意から、天ぷら・お

すし・天どん・茶碗むしなどを次々とあげるが洪作はすべてに拒否反応を示す。洪作にとって、とろろは最高の御馳走だったのだ。天城の山の幸である。とろろとは、自然薯じねんじよを播すりおろして、ダシを利かせた汁で薄めたとろろ汁のことだ。全国的に見て、これを最高の御馳走だとする山村は多かった。東北地方では、餅や雑煮とは別に、正月三箇日にとろろ汁を食べる地がじつに多い。長野県の伊那谷にも正月の「播り初め」がある。

日本人の中には粘着性食物（ネバネバ食・スティックフード）を好む太い流れがある。その典型は「餅」である。佐々木高明は、餅の基層にあるものは稲作以前の里芋で、それをつぶしたものでたつたのではないかと述べている（『続・照葉樹林文化——東アジア文化の原流』中公新書・一九七六年）。里芋の原産地は熱帯だがこの国の中でも北漸した。これを家近くの定畑で栽培したことから「里芋」と呼ばれてきた。対して、野生のヤマノイモ科の自然薯は一般に「山芋」と呼ばれている。山芋は採集根茎類で、始原以来、縄文以来の採

婆さんは、それを木につけたままで熟させることを望んでいた。しかし、折角赤くなりかかると、烏がつついたり、果実そのものの重みで木から落ちたりした。そんな時の祖母の落胆の仕方は烈しかった。……だめ、だめ。夏蜜柑でも柚柑ゆずかんでも、何でも上げるけど、これだけはだめ。これは坊のもの、……烏がつつき出す頃になると、おかのお婆さんは、近所の人を頼んで、みの柿をみんなとってしまい、それを米櫃こめびつに入れた。私は毎日のように、まっかに熟れた果物を一個ずつ食べた。半分は割って、二回に食べた。夜は体が冷えるからと言って与えられなかった。」——

美濃柿は岐阜県美濃加茂市蜂屋原産の渋柿で、実は大きく、長さ十センチ、二五〇グラムに及ぶものもある。長楕円形で頂部がとがり、四本の溝がある。蜂屋柿ともいう。長野箒原（沖組）の浅田重子さん（大正八年生まれ）は次のように語った。美濃柿のことは大柿とも呼んだ。正月にはコガネ餅と称して山梔子くちなしで色着けをした餅を搗いたのだが、これに美濃柿の熟柿をジャムのようにしてつけて食べたものだ。浅田喜朗家

集根茎類であり、その粘着性は著しい。粘着系儀礼食物を溯源すれば、餅↓里芋にとどまることなく、明らかに、餅↓里芋↓山芋という図式が確認できる。洪ちゃがこだわった山のムラの御馳走「とろろ汁」は、この国の、古層の晴れの日の食物だったのである。

湯ヶ島長野の浅田喜朗さんは、長野には山芋の「山の口あけ」があり、それは十一月一日だったという。山の口あけとは採掘解禁日のことで、その日までムラびとたちは勝手に山芋を掘ってはいけないのである。山芋は、貴重な山の恵みであるため、共同体で共同管理されていたことになる。屋根葺やねふき萱がやの萱刈りにも「山の口」があり、それは十一月十日ごろだった。萱刈りのためにムラびとたちは出合いで山道の整備をした。山道整備が終ると、その夜、とろろ汁で宴会をした。なお、浅田家では毎年一月二日の夕食に必ずとろろ汁を食べる。

秋——美濃柿

「みの柿の木は、私の家にしかなかった。おかのおでは、美濃柿を、米櫃の中へ藁を敷いて置いたり、キリダメと呼ばれるこうじがた麴蓋こうじがたに並べて保存した。麴蓋一杯五十個入った。正月まで置くと熟柿になる。一月四日には美濃柿の熟柿を仏器に盛って仏前に供えた。来客には美濃柿の熟柿を皿に盛って出した。この地方においては、柿の中でも美濃柿が特別に扱われていたことがわかる。

浅田喜朗家には美濃柿の木が二本あり、その柿の木の権利は祖母のちさ（明治二十六年生まれ）にあるとされ、美濃柿は祖母が管理していた。長野県飯田市立石では曾祖母のことを親しみをこめて「ひいさま」と呼んだが、同地の佐々木要蔵（大正七年生まれ）家にはひいさまの柿の木と呼ばれる市田柿の木が二本あり、柿の実はいいさまが管理していた。大阪府の南河内の山地には、女性が嫁いできた折に渋柿の木を植え、木が実をつけるようになると干し柿にし、小遣銭を得た。そして、老いて他界した時にはこの木を火葬の薪に使ったという伝承がある。女性が管理する柿の木の民俗は様々あった。おかのお婆さんが坊のために守った美

濃柿の木も右の事例と無縁ではなからう。

冬——猪肉・ひねり餅

「冬になって猪の肉を貰った時とか、本家で鶏を貰った時とか、そんな場合しか肉は口に入らなかったようである。」——猪肉は臭い消しや相性から、葱・牛蒡・大根などと味噌味で煮ることが多いが好みにより様々である。鶏肉は冬とは限らず、来客などの折に鶏がつぶされる。それは、釈迦空の歌に「ゆくりなく訪ひしわれゆゑ、山の家の雛の親鳥はくびられにけむ」(『海やまのあひだ』)と詠まれたこときものである。「寒くなると、酒を造っている親戚の家では酒の仕込みが始まり、他村から何人かの男たちがやって来て、毎日のように酒蔵で働いた。この酒の仕込みの時期に私は眠いのを我慢して、暗いうちに起き出し、祖母に連れられて、田圃の畔道を通って、親戚の酒蔵にひねり餅なるものを貰いに行くことがあった。」——「ひねり餅」とは、造り酒屋の竈で、醸造用の米の蒸し具合を確かめるために蒸し米を指先でおさえて練ったも

粉食

そば

「しろばんば」の中に心に沁みる場面がある。「十月の中頃のある夜、洪作はおぬい婆さんのためにそばがきを作った。そば粉を茶碗の中に入れ、熱い湯を少しずつその上にかけて行って、それを箸で掻き廻した。おぬい婆さんは、洪作の手もとに眼を当てながら、何度も、「火傷しなさんな」と注意した。おぬい婆さんはうまそうにそばがきを食べた。「洪ちゃんに作



そばがき

って貰ったそばがきを食べれば、これで思い残すことはない」そう言ったと思うと、おぬい婆さんは皺だらけの手を眼のところへ持つて行った。おぬい婆さんの眼からは涙が出て

のをいう。一般的には、余分にひねって、神棚に供えたり、得意先に配ったりする。靖少年はそれをさずかったのであり、一冬、二・三回の楽しみだった。これは、本来的に言えば、仕込み祝いの返礼だったのである。家々の味噌づくりでも、仕込み祝いが行われていた。その返礼には煮豆をさずかるのが習いだった。

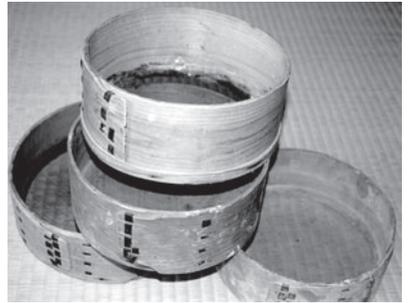
土蔵の暮らしと食のこよみ

おかのお婆さんとの土蔵の暮らしの中には「食」のきめごとがあった。毎月の決まりは六日の汁粉、これは靖少年の誕生日(明治四十年五月六日)のお祝いである。十一日のちらしずしは曾祖父潔の命日、他に月の中ごろおはぎを作った。そのほか通知表を持ち帰る日にはおかのお婆さん最大の御馳走、「ライスカレー」と決まっていた。病気の時の葛湯、食の進まない時のそばがき。汁粉には、餅のある時は餅が、餅のない時は糰粉団子などが入っていたものと思われる。

いた。「洪ちゃんに、ずいぶんそばがきを作った。洪作もこの時、つた」おぬい婆さんの声は震えていた。洪作もこの時、

現在、そばと言えばそのほとんどがソバキリであり、そばがきはほとんど見られない。そばがきの製法は引用文中にある通りである。練りあげられたものを箸でつまみ、醤油をつけたり、醤油と薬味を混ぜてつけて食べるのが一般的で、これはソバの麩の食法である。対して、ソバキリは晴れの食法だった。湯ヶ島に生まれ育った斎藤仙三さん(明治二十五年生まれ)は当地のソバの食法として、①ソバ粉を練って水団のようにして食べる。②そばがきは、練る時に塩を混ぜて塩味にした。③塩味のそばがきを団子にして食べることもあった——と語っていた。

筆者も幼少のころ、風邪をひいたり、体調を崩したりした時、曾祖母まみ(明治六年生まれ)がそばがきを作ってくれた。それは新ソバを、まみが石臼で碾いたものだった。何度も種類のちがう篩にかけて精選す



そば粉の精選で段階的に使う篩

るものの、どうしても、焦げ茶色の、細かいソバカス(皮)が混ってしまう。精度の高い現在の製粉機で作られた細かく白いソバ粉とは異なり、灰色がかつていた。練りあげられたソバを箸でつまんで手塩皿の醤油をほんの少しつけて口に運ぶ。ソバの香りが鼻孔に満ちた。うまかった。今、あの香りにめぐり会うことは稀だ。

麦粉

「……楽しかったのは麦粉である。湯でねらないで、そのまま口に頬張ると、口の中も、口の外も粉だらけになった。」——『しろばんば』では麦粉のことを「はったいの粉」と表現している。ハツタイ粉という呼称

周囲に麦粉を撒きながら自分の足にもかける行事がある。また奄美大島では、ハブを除けるためにハツタイ粉を使う。水精の象徴ともされる蛇・毒蛇の力を麦粉の吸湿力を以って封じようとする呪術である(拙著『生態民俗学序説』白水社・一九八七年)。また、湿気の多くなる梅雨時に、「はらわたが腐るのを防ぐ」「体の湿気を除いて元気になる」などと称して除湿力のある麦粉を積極的に食べる習慣が各地にある。靖少年とおかのお婆さんが、練らない麦粉を粉のまま食べている背後にはこうした民俗が伏流していたのではなからうか。

はなむけ・みやげとしての穀粉

『しろばんば』の中に、洪作がおぬい婆さんとともに父母の住んでいる豊橋の家を訪れる旅の場面がある。本家はもとより、近隣の人びとから豊橋の家にみやげが託される。小豆・干椎茸・わさびなど——。修善寺行きの馬車に乗る。門野原で石森家の伯母が馬車を止めた。「洪ちゃ、洪ちゃ」と呼んだ。歯を黒く染めた

は、石臼以前の堅臼・搗き杵ではたいて粉化していたころの製法を示すもので「ハタキ粉」の意である。長野の浅田純子さんは裸麦を煎って石臼で碾いたものを「香煎」と呼び、湯で練って食べたという。浅田喜朗さんは、裸麦を煎って碾き、砂糖を加えて熱湯で掻いて食べ、これを「コガシ」と呼んだ。新麦がとれるとコガシを作り、ヨウジャ(夕茶)昼と夕食の間の間食に食べた。「麦コガシ」と呼ぶ地もあり、九州の椎葉村では「コッポー」と呼ぶ。静岡県内で、新麦がとれたら香煎を作って仏壇にあげるといふ例を多く耳にした。初夏の麦粉・香煎には、新麦の収穫を祝う要素もある。藤枝市花倉の秋山政雄さん(明治二十九年生まれ)から次の狂歌を聞いたことがあった。「吹けば舞ふ嘗めれば噎せるコウセン寺 鼻のオード(大戸)玄関口」が白くなるらむ——靖少年が、麦粉を練らないで粉のまま頬張り、おかのお婆さんともに楽しむ場面と共通するものである。口の中も口の外も粉だらけになって噎せるのは麦粉に吸湿力があるからである。その麦粉の吸湿力を信じて蝮除けとして屋敷の母屋の

伯母であった。……こんどはおぬい婆さんの方に、「なんにも上げられるものがないんで、これ持って来た。町に住んで贅沢に慣れているんでこんなもの食べんかも判らんが、食べんかったら、洪ちゃ、ごみ箱へでも棄てるこっちゃ」あとの半分は洪作に言った。再び馬車は動き出した。おぬい婆さんは受け取った紙包みを手の上に載せて重さを計るように二、三度上下させてから、「そば粉、二百匁。——洪ちゃ、覚えておいてくれ。あとでつけんならん」と言った。「そば粉? どれ」先刻おぬい婆さんの体を支えた男の客が手を出した。そして彼もまたおぬい婆さんと同じようにそれを手に載せて上げ下げしてから、「はったいの粉だな、これ。はったいの粉百五十匁じゃ。二百匁はあるまい」——

門野原の伯母が豊橋の家に届けるように託したものはあるが、ここを読んだ時ある種の疑問が浮上した。そば粉にせよ、はったい粉にせよ、なぜ旅立つ人に「粉化したもの」を持たせるのか。この地で常食されているそば粉や麦粉、それも少量である。湿気るかも

しれない——。しかし、作家が自伝的作品に注意深く書きとどめていること、齒黒めという古風な慣行を守り続けている人の営為として描かれていることに注目しなければならぬ。ここには何か古層の民俗が潜んでいるはずだ。——考えるべき問題が次々と浮かんでくる。「粉」はその素材を問わず、原初的には豎臼・杵ではたくという方法によった。大変手数のかかることである。近世以降、庶民の間に石臼（碾き臼）が普及したとはいえ、粒食よりは粉食の方が数段の手数を要した。柳田國男は『木綿以前のこと』（初出一九三九年、『柳田國男全集』九・筑摩書房・一九九八年）の中で、「元來食物の藝と疇との差別は、必ずしも材料の優劣を意味しては居なかつた。……二者の相違は、其調製の為に費さるる労力の量であつた。」と述べている。モノ日や祭日に神に供えられる食物としては、飯よりは一旦粉化してから練り固めたシトギや団子などがより心のこもったものとして選ばれたのである。客のモチなしについても同様のことが言える。こう見ると、門野原の伯母さんは古層の伝統を守っていた

ことにもなる。

旅立つ者に「粉」を持たせる心についていま一つの角度から考えてみたい。旅の途次、そば粉やほしいい粉、それに若干の塩を持っていけば山中でもそばがき、麦粉がきを食べることが出来る。弁当を入れてきた輪っばに水を入れ、焚き火で焼いた石を入れれば水は湯になる。これは、木材河川流送の人足や樵人たちが続けてきた方法である。その湯を使えばよいのである。塩入りのそばがきは前述の通り、湯ヶ島の齋藤仙三さんが伝えていた。仙三さんは、長く温泉客のガイド・荷持ち、天城山ガイドをした人である。こうした粉食法は、馬車も汽車もなかつた時代、歩いて峠を越え、海辺に出、街道に出なければ世間とつながらなかつた伊豆山中のごとき地の人びとにとって、意外に合理的なものだったのではなからうか。粉類の吸湿性が気になるが、厚手の和紙の袋、柿渋刷きの和紙などをうまく組み合わせればこれも解決できたはずだ。即席性に富む穀粉は、徒ちの時代のはなむけに適していたと思われる。とりわけ麦粉は、旅の難路の毒蛇除け・魔除

けの呪力を持つと信じられたことであろう。

井上靖の自伝的作品には民俗の深層を探る緒が散りばめられている。それをたどることが井上靖の原郷探査にもつながってゆくことになる。

鳩のおしらせ③

◎あすなる忌

毎年、井上靖の命日（二月二十九日）に近い日曜日を選び、墓参をはじめ、生地・湯ヶ島で井上靖を偲ぶ催しを行っています。

とき…平成二十八年一月二十四日

十時 墓参（熊野山墓地にて。九時三十分在天城会館に集合）

（以下、天城会館にて開催）

十一時 井上靖作品読書感想文・感想画コンクール表彰式

十三時 劇団しろばんば公演（十二時三十分開場）

主催…伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会

共催…井上靖文学館・井上靖記念文化財団・劇団しろばんば

問い合わせ…伊豆市教育委員会社会教育課

☎〇五五八―八三一五四七六

義父が九州帝国大学を中途退学し、京都帝国大学に転学したのは一九三二年、二十五歳の時である。一九三二年という年は、満州事変、上海事変の後に満州国が建国された年であり、日本の国際情勢も不安定な時期であった。同時に国内においても、思想弾圧が徐々に厳しくなってきた時代である。義父が在籍していた京都帝国大学法学部教授の滝川幸辰が、この年に中央大学で行った講演が文部省、司法省内で、無政府主義的内容であるとして、問題視された。翌一九三三年三月には、共産党員及びその同調者とみなされた裁判官裁判所員が検挙される「司法官赤化事件」が起こった。その影響で同年四月には、当時の司法試験委員であった滝川教授も司法官赤化の元凶とみなされ、当時の鳩

山一郎文相が京大総長に滝川教授の罷免を要求してきた。京都帝大では、法学部教授会や総長らがこの罷免要求を拒否したにも拘わらず、文部省は滝川教授の休職処分を強行した。このため、多くの教授が辞職をするとともに、法学部学生の全員が退学届を提出する等の抗議運動を行った。これに同調した文学部のグループであった花田清輝、古谷綱正等も抗議活動に参加した、いわゆる滝川事件が発生した。このような状況の中で、義父は京都帝大文学部に在籍していたのである。義父の在学当時の学生の抗議活動がどの程度のものであったかは、推し量ることは難しい。ただ、私は京大の大学院生となった時に、東大に始まった学生運動が翌年の昭和四十三年には京大へと飛び火し、学内で

授業ができない状態を体験している。仕方なく、我々は大学の前にある駸々堂しんしんどうという大きな喫茶店でゼミを行ったり、大切な研究資料を、デモの殴り込みに備え、近隣の飲み屋に預かってもらったりしたことがある。あの時ほどの激しさは無かったかもしれないが、学内は、やはり騒然としたものであったろう。

私の学生時代の一時期は、こんな環境の中で授業の無い日々を学生たちはそれぞれ、趣味に没頭したり、部活に精を出したりしていた。中には、余技がプロ並みとなり本業へと進んだ者もいる。義父の場合もそんな落ち着かない大学の空気の中で、趣味を兼ねたアルバイトという気分で気楽に創作活動をしていたのではないか。このころの著作には「三原山晴天」「初恋物語」「明治の月」「流転」などの面白く大衆的なものが多い。

一方で、義父は五十歳を超えたところから「天平の菫」「楼蘭」「敦煌」「蒼き狼」等、中国を舞台とした多くの歴史小説を書き始めている。けれども、これ等は中国文化、中国史に相当詳しくなければなかなか描けな

いものである。京都帝大時代の義父は、その方面の本を相当読み漁ったのであろう。義父の時代の背景を考慮すると、東アジアへの関心が盛り上がり、中国などについての研究が盛んになったのはごく自然なことでもあったろう。

当時の京都帝大では、中国文学者である吉川幸次郎が東方文化研究所（現在の人文科学研究所）で研究を行いつつ、文学部で講師をしていたし、小川環や貝塚茂樹も大学院やこの東方文化研究所で活躍していた時代である。特に京都帝大ではこの頃から大学図書館や東方文化研究所で、東方文化に関する資料や書物が数多く蒐集され、現在でもその分野では最も充実した大学となっている。京都帝大は、義父のようなその方面に興味を持った者にとっては、普通ではなかなか触れられない資料にも容易に接することができる環境が整った大学だったのではないか。

大学卒業後、千葉亀雄賞を受賞したのがきっかけとなり、大阪の毎日新聞社に勤務することとなる。この時代を振り返って義父は自ら、「その時から十五年の

記者生活は、人付き合いの下手であった私に、多くの人々との出会いの場を与えてくれました。宗教界、美術界はもちろん、何と多くの忘れ得ぬ人々がいることでしょう。まさに私は、キラ星の只中に投げ込まれたのです。これが私の人間形成の上にかに大きい意味を持っているか、ここに改めて言うまでもありません」と述懐している（『毎日新聞と私』一九八四年四月）。

関西在住期間中には、児童文学誌『きりん』を立ち上げ、共に編集に当たった詩人の竹中郁や足立巻一、その挿絵を描いた画家の須田剋太、脇田和、小磯良平等と交友し、仕事上の新聞取材などを通じては、画家の上村松篁や陶芸家の河井寛次郎など、通常なら望んでも得られないような知識人、文化人との上質な交友がもてたという。

さて、役所勤めをしていた私には、幾度かの、人生の転機となる海外勤務や他機関への出向などの機会が訪れた。そんな時、悩む私に、義父は「人生というのは、先に何があるかわからない、あたえられたチャンスは躊躇なくそれを掴むこと」、「人は誰でも一つのこ

とに十年も真剣に取り組めば必ずその分野のプロとなる。一生懸命にやっつてごらん」とアドバイスをくれたものだが、そのたびに不思議に心が落ち着き、覚悟が決められた。義父の言葉には常に客観的、かつ人の心を落ち着かせるものがあつた。

芥川賞受賞に際し、選考委員であつた佐藤春夫から「井上は腕達者で作風も常識的ではあるが、飽くまで正直に腕にまかせて人を煙にまいてやろうというようになすれっからしの下劣なもの無いのがよい。作者の人柄であろう」と評された義父。その相手を不快にさせることの無い人当たりの良さ、達観した人生観は、生来持っていたものもあるだろうが、芥川賞受賞以前の関西在住期間に獲得したものではないかと、関西で生まれ育ち、同じ京都大学で学んだ娘婿として、長年井上靖と接してきた私には、そう感じられる。

義父の小説「城砦」に「愛が信じられないんなら、愛なしで生きてごらん。世の中が信じられないなら、世の中を信じないで生きてごらん。人間が信じられなかつたら、人間を信じないで生きてごらん。生きる

いうことは恐らく、そうしたこととは別ですよ。——この石のように生きてごらん。僕は宗教家でも、哲学者でもないから、こんなことしか言えない」という言葉が出てくる。悩みを持つ人間に対し、自己の妄執にとらわれず自分を一度客観視してみても、という問いかけをしている言葉である。

井上靖ファンという人の中には、人生の転機に義父の小説から得られた一言、一節で救われたという人が少なからずいるのは、恐らく、作品の中のこうした客観的でありながら温かみのある助言に慰められたことがあるからではないか。宗教家でも、哲学者でもない義父は、小説を通して多くの読者に、宗教書や哲学書以上の共感を与え、慰めを感じさせているのである。

義父は京大在学中に、井上家にとってはかなり近い親戚の、京大医学部教授の足立文太郎の長女ふみと結婚している。その結婚により、義父井上靖は交際の広い足立家の雰囲気も知った。周辺の親族や知人から、関西の財界の成功者の世界を覗く機会も与えられた。新聞に連載され話題となった「明日来る人」のモデル

とされる杉道助がそうであるし、三味線弾きを主人公とした「流転」も足立家の周囲にモデルとなった人や世界があつて書かれた作品である。小説家としてデビューする前の学生時代、そして記者時代を過ごした関西。その関西での体験が、後に幾つもの優れた小説を生む力となって、多くの人々に感動を与えている。

さて、「北辰居其所、而衆星共之」は論語の中の言葉であるが、この一節を義父は好んで口にしてきた。政治を行うに徳を以てするは、例えるならば北極星が中心となつて、周りの星が自然と集ってくるようなものであるという意味である。今考えてみると、義父井上靖は社会人となつた私の半生にとっては、まさに北極星であつたかもしれない。そうであるならば、もしかすると、義父のような人をもって、「徳ある人」というのかもしれない。

父、最後の休息

井上卓也
(井上靖・次男)

この連載コラムでは、父の仕事以外の、言ってみれば、父の私生活での休息時間の過ごし方のいろいろを、家族が撮った写真を使いながら、皆様にご披露してきた。今回は、このテーマの最終回と位置付けて、父の最後の休息について、ご報告したいと思う。

父は、昭和も末期の一九八七年頃から体調を崩し、「どうも……食べ物が胸につかえる気がする」と言い始めた。

父は生来丈夫なほうだったし、体調については楽天的でもあったから、そう言い出す前には、ある程度の我慢の時期があったと思う。つまり、父自身、この時期には、これは放っておけないかもしれない……とい

う強い思いに捕らえられたものと思われる。

母は父の言葉を聞くや、すぐに知人でもあった、国立がんセンターに勤められておられたK医師の所に、父を引っ張って行った。

程無く、父は食道癌を宣告されるのであるが、ここは、父の医学的な闘病のことを書く場ではないので、大手術を受ける前後のことで、父らしいユーモアとか、詩人としての父の死に対する覚悟みたいなものを僕が気が付いた範囲で書いてみた。ここに書いたことは、初めて書くことではなく、諸々の雑誌や拙著にこれまで書いてきたことなので、お断りをしなくてはいけなし、また必ずしも休息のことを書いているわけではないので、これもお許しをいただかなければならない。

まずは、癌の宣告を受けて病院から帰ってきた日のこと。母は、父に向かって、父が癌の宣告を受けて帰

ってきた悔しさも手伝って(母は、病院には同行せず、確か兄が同行したような記憶がある)、

「あなた、癌ですってよ。言わないこっちゃないですよ。お酒やタバコを控えて下さいとあれほど言ったのに、やめないからこんなことになるんですよ」と、遠慮会釈無く、そんな言葉を父にぶつけていた。

すると、父は怒りもしないで、

「そりゃ鬼の首でも取ったような言い方はするな。人間、八十年も生きていれば、酒を飲もうが飲むまいが、誰だって、癌くらいにはなるよ」

と、実に父らしい言葉で、答えていた。側にいた僕は、この父の言葉を聞いて、なんとなくホッとしたような気分させられたものだった。

父はこの後、ひと月も経たないうちに大手術を受けたのだが、何ヶ月かすると、素人目には意外と元気になって、日仏賢人会議への出席のためにフランスへ出かけたり、「孔子」の執筆を再開したりと、我々を驚

かせる行動力を発揮した。

しかし、仕事るとき以外は、父は書齋に籠って、本や原稿の整理をしていた。明らかに、自分の死期を意識して。他人には、自分の苦しい様子は決して見せてはならない。これが父の、闘病生活を貫いた詩人としての美学であったから、父は苦しさが増した、闘病の「後期」には、決して外には出ずに、書齋に閉じこもっていた。もちろん医師の勧めもあったこととは思わなかった。

しだいに病が重くなって、父は床につく時間が長くなっていったが、一九九〇年の年の瀬になって、医師から入院への強い勧めがあった。肺炎の危機が迫ってきていたからだ。しかし、父は頑として入院を拒否した。我々家族のものが、いくら父を説得しても、父は絶対に言うことを聞かなかった。父は父らしい理由で、我々に語った。といっても怒鳴り散らしてだが、

「暮れに入院して、正月に生きて帰ってきた奴がどこにいる！」

これが父の入院拒絶の根拠であった。僕は、こんな



写真はどちらも 1976 年ごろ、世田谷の井上家の庭で
 右頁：左より父・靖、筆者、娘・直子、妻・弓子
 左頁：これまでは家族が撮った父の写真をこの連載で紹介して
 きたがこれは逆。父が僕らを撮った珍しい写真。僕は兄や子ども
 たちにファインダーを向けている



を意味するものではなく、もっと広い意味での生命に
 対する尊敬を感じさせた。



大声が出せるなら、なるほど入院の必要なってないと
 変に納得した。
 医師からの直接の電話にも、父は、言葉こそ丁寧だ
 が、はっきりと拒絶の言葉を伝えていた。
 つまり、自分は近々死ぬのに、どうして、自由が利
 かない病院というところに拘束されなければならぬの
 だと、父は考えているらしかった。入院したら痛が
 治るとは、父は夢にも思っていなかった。
 それは、父の最後の詩、『病床日誌』を読めば、隅々
 まで分かる。
 そこには、実に清々しい、自分の死に対する覚悟が
 読み取れる詩がよこたわっている。あつぱれである。
 こんなことを父の最後の休息というのもおかしなこ
 とだが、このシリーズの最後のエッセイとしては、こ
 のテーマは、避けることができない。父は結局は病院
 で最期の時を迎えたが、それは死の準備のための入院
 であった。それは医師の、
 「先生には、楽になっていただきましようね」
 という一言で十分に理解された。それは決して安楽死

事業報告

理事長 井上修一

平成二十六年年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

(一) 井上靖を記念する文化賞

文学、美術、歴史等の分野において貢献した人・団体を顕彰する「井上靖文化賞」は、今年度、残念ながら再開できませんでした。関係機関と協議、相談を続けており、二十七年年度中には再開に向けての骨子が固まりそうです。

(二) 国内外における日本文化の研究助成

「井上靖（奨励金）賞」は、オーストラリアにおける日本文学の研究奨励のために、平成十八年にシドニ

ー大学に設立したものです。選考はシドニー大学の井上靖（奨励金）賞選考委員会にお願いしてあります。

今年度はその第八回になりますが、シドニー大学のレベッカ・サター博士（論文『Grand Demons and Little Devils: Akutagawa's Kirishitan mono as a Mirror of Modernity?』）にさしあげることになり、平成二十六年十月三十一日、シドニー大学・国際交流基金シドニー・本財団共催、NSW豪日協会・シドニー日本人会等の後援で、シドニー大学のオウデイトリウム・チャールズ・パーキンズ・センターにて授与式が行われました。



レベッカ・サター博士

ベトナムに本財団事務局

長を派遣しました。ベトナムにおける日本文学・文学研究者もしくは研究団体に対する援助事業を、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターと共催で平成二十七年より開始することとなりました。

また、井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」の研究誌『井上靖研究』の刊行助成を行うとともに、ホームページ作成の助成もいたしました。

(三) 井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

○旭川市立「井上靖記念館」
平成二十六年四月一日、旭川市立井上靖記念館と展示資料寄託契約（一年）を更新
平成二十六年七月一日、『旭川市井上靖記念館報』第十四号の発行に協賛
常設展示とともに、以下の企画展などを共催で実施しました。

平成二十六年四月二十六日から七月二十七日、第一回企画展「井上靖 人と文学Ⅴ 『鬪牛』『狐銃』の世界」（『鬪牛』と『狐銃』を中心に「比良のシャクナゲ」

『漆胡樽』『利休の死』『玉碗記』等、井上靖が昭和二十四年から二十六年にかけて発表した作品の展示と作品世界の解説）

五月十七日には上田郁子氏による企画展の「井上靖講座」

平成二十六年八月二日から十一月十六日、第二回企画展「映像化された井上作品Ⅰ」（数多い映画化作品の中から『流転』『あすなる物語』『戦国無頼』を取り上げ紹介するとともに、『流転』では初出誌の『サンデー毎日』の各号や堂本印象による挿画の原画、撮影時のスチール写真等を展示）

八月二十三日には「井上靖講座」で井上靖原作の映画『戦国無頼』を、また十月八日に『狐銃』を上映

平成二十六年十一月二十二日から平成二十七年二月十五日、第三回企画展「井上靖 初出掲載誌展」（旭川文学資料友の会）が収蔵する雑誌を中心に井上靖作品の初出掲載誌の展示。全集未収録の『朱い門』『波濤』『群舞』などの作品の初出掲載誌も含まれている）

十二月六日には「井上靖講座」

平成二十七年二月二十一日から五月十七日、第四回企画展「井上靖と西域紀行展1」（西域紀行記や詩を紹介する他、写真や書籍を展示）

三月七日には「井上靖講座」

○長泉町「井上靖文学館」

平成二十六年三月二十七日から七月二十二日、「伊豆への旅・春 川端康成、梶井基次郎、井上靖」展の後援

平成二十六年七月二十四日から十二月二十五日、「『食べる』文学」展の後援

平成二十七年一月八日から四月二十日、「『あした来る人』から『氷壁』へ。」展の後援

○鳥取県日南町「日南町総合文化センター井上靖文学室」

展示資料寄託契約のもとに資料展示に協力

○米子市「アジア博物館」内「井上靖記念館」

四高その青春と光芒」展示室内で行われた「鑑真まつり」を後援

森井道男氏による講話「井上靖の次女黒田佳子さんの講演について」と井口時次郎氏（劇団ドリムチョップ主宰）による井上靖随筆「自然との奔放な生活」の朗読

○平成二十六年七月二十一日、石川近代文学館で吉村雅弘氏（劇団夢宇人）による『北の海』（抄）朗読会の後援

○平成二十六年七月二十六日、井上靖研究会の夏季研究会が三島市立図書館で行われ本財団からも参加いたしました。杜文嬌氏（復旦大学大学院・創価大学交換留学生）の研究発表「牝鹿の失踪と復帰——井上靖の『蒼き狼』における妻と妃の像について」、杉淵洋一氏（愛知教育大学非常勤講師）の研究発表「井上靖におけるフランス——そのテクストから見えてくるもの」、芳賀徹氏（東京大学名誉教授・静岡県立美術館館長）の

平成二十六年九月二十九日、友の会会報『海鳴り』第三十六号の発行に協力

平成二十七年三月三十一日、友の会会報『海鳴り』第三十七号の発行に協力

（四）日本近代文学に関する資料収集及び調査研究

日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行うとともに、平成二十七年三月、日本近代文学館の資料収集に協力しました。また当財団の資料収集・調査研究結果などを掲載している当財団機関誌『伝書鳩』第十五号を発行しました。

（五）井上靖に関する講演などの開催

○平成二十六年四月二十日、井上靖文学館（長泉町）で浦城幾世氏による講演「瓊花と鑑真和上」を実施

○平成二十六年五月六日、石川近代文学館（石川四高記念文化交流館内）の「四高が育んだ多彩な才能——

講演「井上靖と絵画」

○平成二十六年十月三十一日、前項（二）のシドニー大学のオウデイトリウム・チャールズ・パーキンズ・センターでの授与式の後、松竹映画、井上靖原作『わが母の記』の上映

○平成二十六年十二月七日、井上靖研究会の冬季研究会が國學院大學院友会館で行われ、本財団からも参加いたしました。劉淙淙氏（皇学館大学大学院）の研究発表「井上靖『洪水』における自然崇拜——『水経注』に基づいて」、藤木尚子氏（公益財団法人神奈川文学振興会・資料課主査）による特別発表「神奈川近代文学館所蔵〈井上靖文庫〉の紹介」

○平成二十六年十二月十四日、旭川市教育委員会・井上靖記念館・北海道新聞社主催、本財団後援で全国の中・高校生を対象にした第三回「井上靖記念館青少年エッセーコンクール」の表彰式が井上靖記念館ラウン

ジで行われました。募集テーマは「ブ・カ・ツ」です。審査員長は吉増剛造氏（詩人）、審査員は平原一良（北海道文学館副理事長）、鳥居和比徒（北海道新聞文化部長）の両氏です。

最優秀賞

中学の部 藤原陽香「『ブカツ』を楽しむ」（旭川市立神楽中学校一年）

高校の部 鈴木ちひろ「お茶会をいたしましょう」（北海道おといねっぶ美術工芸高等学校三年）

（北海道おといねっぶ美術工芸高等学校三年）

表彰式の後、吉増剛造氏によるミニ講演会「中原中也の秘密」が行われました。

○平成二十七年一月二十五日、「あすなる忌」井上靖追悼事業が、伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館（長泉町）・劇団しろばんば・本財団共催、伊豆市・静岡新聞社・静岡放送などの後援で催されました。伊豆市湯ヶ島熊野山墓地での墓参会、天城会館劇場ホールで井上靖作品読書感想文・感想画コンクール優秀作品の発表ならびに表彰式が行われま

靖に関する次のような催しがありました。

○特別展「官兵衛と軍師を描いた文豪たち」

平成二十六年七月五日から八月二十四日、姫路文学館（姫路市）特別展示室・南館ギャラリーにて。井上靖の『風林火山』の初版本、『山本勘助ノート』、随筆『風林火山』の映画化『風林火山』と新国劇』の原稿などの展示

○井上靖文学館（長泉町）文学展講座

平成二十六年六月二十二日と七月六日、講師・勝呂奏氏（桜美林大学教授）「自然、人情、そして文学——春」

平成二十六年十月五日、講師・藤澤全氏（元日本大学教授）『井上靖の小説世界』刊行記念——しろばんば

平成二十七年三月二十二日、講師・芳賀孝郎氏（元日本山岳会副会長）『『あした来る人』のモデル・加藤泰安氏をかたる』

した。

最優秀賞

小学生の部 大川いふ「『しろばんば』が教えてくれたこと」（天城小学校六年）

中学生の部 高澤英子「難き自由」（筑波大学付属中学校二年）、土居早織「『しろばんば』を読んで」（愛光中学校一年）

高校生の部と感想画では最優秀賞がありませんでした。

また午後には同ホールで劇団「しろばんば」による公演「しろばんば——幼き日」（監督脚本…田村千恵美）が上演されました。

（六）特定寄附事業

平成二十六年度においては、特定寄附事業はありませんでした。

（七）その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上

○旭川市立井上靖記念館・文学講演会

平成二十六年六月二十八日、講師・藤澤全氏（元日本大学教授）『『比良のシャクナゲ』——詩と物語の融合のコードを解く』

平成二十六年七月十九日、講師・平原一良（北海道文学館副理事長）『北海道ゆかりの作家』——八木義徳の文学』

平成二十六年九月二十七日、講師・石本裕之氏（国立旭川工業高等専門学校教授）『『ある偽作家の生涯』を読む——人間や運命に対する井上靖のものの見方について』

平成二十七年一月二十四日、講師・片山晴夫氏（北海道教育大学特任教授）『戦後文学と井上靖』

○井上靖ナカマドの会（旭川市立井上靖記念館内）

平成二十六年七月三十日、『赤い実の洋燈』第四十号発行

平成二十七年二月二十日、『赤い実の洋燈』第四十五号発行

○「林忠彦写真展 日本の作家一〇九人の顔」
平成二十六年九月二十六日から十一月二十五日、千代田区立日比谷図書館文化館特別展示室にて井上靖の肖像写真展示

○日本近代文学館・秋の特別展

平成二十六年九月二十七日から十一月二十二日、「作家の産声をきく 芥川賞・直木賞原稿コレクション展 所蔵原稿・初版本を中心に」、「闘牛」の原稿を展示

○「桜井記紀万葉歌碑原書展——昭和の文人が愛した神なびの郷」

平成二十六年十一月二十六日から三十日、あべのハルカス近鉄本店近鉄アート館にて、奈良県桜井市紀万葉歌碑にある井上靖の揮毫による道標「盤余道」の写真、同じく井上靖の「いわれみち盤余道」の書と肖像写真を展示

○第八十七回企画画展「近代を駆け抜けた作家たち——文豪たちの文字は語る」
平成二十七年一月十七日から三月二十二日、群馬県立土屋文明記念文学館にて、原稿「ほくろのある金魚」、書簡四通の展示

○「伊豆文学フェスティバル」
平成二十七年三月八日、プラサヴェルデ（沼津市）にて、第十八回伊豆文学賞表彰式と伊豆文学塾（審査員による講演会・座談会）

伊豆文学フェスティバル実行委員会・静岡県・静岡県教育委員会主催

○「伊豆文学まつり」（伊豆文学フェスティバル連携イベント）

平成二十七年一月二十五日から三月八日、天城会館など伊豆市内にて、伊豆市・伊豆市教育委員会主催
井上靖作品読書感想文・感想画コンクール入選作品展示・伊豆文学散歩・伊豆市ゆかりの文学作品朗読

会・伊豆市ゆかりの文学作品特別展示・井上靖資料室公開・劇団しろばんば創作劇・ミュージカルしろばんば上演

（八）役員

平成二十六年の本財団の役員（理事、監事）、評議員は次の方々でした。

理事長 井上修一
常務理事 浦城幾世
理事 伊藤 暁 大越幸夫 狩野伸洋 佐藤吉之輔
佐藤純子
監事 大谷光敏
評議員 井上卓也 相賀昌宏 小西龍作 黒井千次
篠 弘 三木啓史 三好 徹 山口 建
(五十音順)



図書だより



二〇一四年四月以降に刊行、発表された井上靖に関係する書籍、論文、記事等をご紹介します。

【書籍】

- 瀬戸口宣司『詩』という場所——井上靖・高見順・野呂邦暢・村山槐多』（風都舎、二〇一四年）
- 藤澤全『井上靖の小説世界——ストーリーテラーの原風景』（勉誠出版、二〇一四年）

【論文・記事】

- 趙秀娟「井上靖文学における「川」」（『福井工業大 学研究紀要』四十四号、二〇一四年六月）
- 塚野耕「井上靖『レンブラントの自画像』——小説家

の美術ノート』を読む」（『絵の華・本の華』ユニオンプレス、二〇一四年七月）

- 高木伸幸「井上靖「聖者」論——イシク・クル湖伝説と現代」（『国文学攷』二二三号、二〇一四年九月）
- 山田哲久「井上靖「僧行賀の涙」論——方法としての〈視点〉」（『同志社国文学』八十一号、二〇一四年十一月）

- 嵐山光三郎「井上靖の湯ヶ島」（『ぼくの交遊録的読書術』新講社、二〇一五年）
- 蘇洋「井上靖「孔子」論——負函という地の意味」（『阪神近代文学研究』十六号、二〇一五年五月）

- 半田美永「井上靖『孔子』覚書——「逝くもの」の

彼方に」（『皇学館論叢』四十八巻三号、二〇一五年六月）

- 安元隆子「大黒屋光太夫の描き方——井上靖「おろしや国酔夢譚」と吉村昭『大黒屋光太夫』（『解釈』六十一巻七・八号、二〇一五年七月）

【その他】

- 井上靖記念館編『井上靖記念館青少年エッセーコンクール優秀作品集』（井上靖記念館、二〇一五年）
- 『旭川が生んだ文豪井上靖——井上靖読書会二十周年記念誌』（井上靖読書会、二〇一五年）
- 『井上靖「おろしや国酔夢譚」の世界——大黒屋光太夫記念館第11回特別展』（鈴鹿市、二〇一五年）

二〇一五年七月二十日に発行された『井上靖研究』第十四号の主要な目次を紹介します。

【論文】

- 李哲権「『聖者』論——水と石と月の隠喩の次元を生きたるテキスト」
- 劉淙淙「井上靖「洪水」における自然への畏怖——典拠『水経注』との比較から」
- 杉淵洋一「井上靖におけるフランス——そのテキストから見えてくるもの」
- 勝倉壽一「井上靖における信仰と死の問題」
- 西座理恵「あすなろ物語」論——「春の狐火」より」
- 小関一彰「核状況下における文学」と『城砦』

【その他】

- 瀬戸口宣司「井上靖と雑誌『風景』」
- 藤木尚子「神奈川近代文学館所蔵の井上靖資料について」

編集後記

『伝書鳩』十六号をお送りいたします。叔母から編集作業を引き継ぎ、夫と共に取り組み始めてから、今号で十冊目。区切りの号となりました。

夫の職業が編集者であったからこそ、頼まれた作業ではありますが、孫の中でも末の方の、祖父の記憶の最も薄い私が本財団に関わるとは夢にも思っていました。

巻頭の詩は、祖父が私を登場させた唯一の作品ですので、この区切りの号に、と選びました。

また、ちょうど私の長女も同じ五歳。幼児らしい突飛な発言に、正しく応じてやる事ができないまま日々が過ぎていきます。

十四号から連載を書いてくださっている民俗学者の野本寛一先生が、文化功労者になられました。ここにお祝いを申し上げます。

皆さま、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

西村承子

伝書鳩 第16号

発行 二〇一五年十二月十八日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九 井上芳

印刷所 株式会社 厚徳社

発行所 一般財団法人 井上靖記念文化財団